■2015年（平成27年）4月21日　内外教育　第3種郵便物認可

あすの教育

心の発達に予防教育を

山崎勝之鳴門教育大学予防教育科学センター所長に聞く

いじめや不登校などの問題が起こらぬよう、予防的に子どもの健全な心の育成を目指す「予防教育」の取り組みが、鳴門教育大学（徳島県鳴門市）の予防教育科学センターで始まっている。2009年に設置された同センターは、これまでに心理学や脳科学の知見を基に独自の教材と方法を開発し、全国の小中学校で実践してきた。

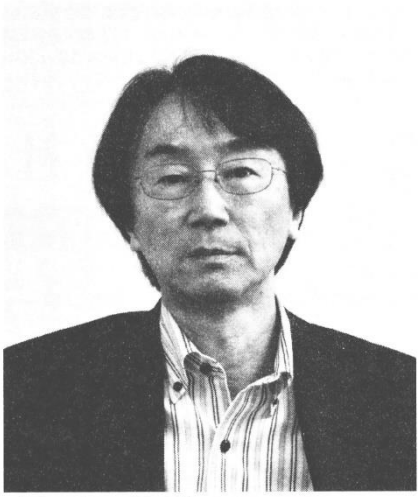
予防教育は、基礎的な「ベース総合教育」と応用的な「オプショナル教育」から成る。授業にはアニメーションやゲームを採り入れて、楽しく学べるよう工夫する一方、客観的な指標に基づく評価制度も導入。ベース総合教育だけでも、小学3年～中学1年まで計160時間のプログラムが完成しているという。「教育現場は起こった問題の対処に躍起になっているが、未然に防ぐことに本腰を入れるべきだ」と述べる山崎勝之センター所長に、予防教育の狙いについて聞いた。

■子どもは遊びの中で学ぶ

――予防教育とは何か。

脳科学や心理学では、われわれの営みの95％程度は、意識が関与しない無意識につかさどられているとされる。何かを行おうとしたり判断したりする時は、無意識の力が非常に大きなウエートを占めている。そのメカニズムを利用して、子どもの特性の変容を図ろうとしている。

そこで注目するのは「情動」や「感情」。脳科学では、情動とは起こったときには意識できない体の反応を言う。まとまって強く起こると、悲しいとかうれしいといった感情となる。この情動の力が、高次の心の特徴である、考えたり、見たり、感じたりをコントロールしている。



インタビューに答える山崎センター所長

だから、いくら授業で正しい考え方やものの見方、振る舞い方を教え込んでも、現実的にそういう力は正しく動かない。どうしたらいいかというと、情動とか感情がたっぷり喚起された状態で埋め込まれていくことが必要だ。全体がセットになって記憶化された時に、初めて学習が成立する。うまくいくと、現実の場面でも、情動や感情に引っ張られるように高次の心の特徴が実際に適用される。そうしたメカニズムを学習に反映し、子どもを健全にしていくというのが、私たちの教育の根本だ。

こうした説明をすると「難しい」と言われるので、一言で「子どもは遊びの中で学ぶ」と言っている。私たちは、教室で行われる授業の時空間を遊びの空間と時間に変える。子どもたちは、集団遊びをしている時は、喜々としており、情動感情が動いてる。その中で「こう考えたらいいんだ」「こう振る舞ったらいいんだ」ということを学んでいく。その学習事態はたった1回きりの経験でも、「一生もの」になるようなインパクトのある学習になる。それを授業の中で実現させていく。

目標にしているのは、子どもが健康になり、適応的になるための一番大切な心の特徴を育成していくこと。これまでに分かってきたのは、心の育成をすると、学力までもが伸びていく。やはり、そういう力は学力の土台になっている。そこをなおざりにして、学力問題は語れない。

――どう普及していくのか。

理論面から実践面まで語る機会は多々あって、実際の授業を見てもらうことも多い。授業に触れた教員の半分は「すごくいい」と言って、すぐ興味を持ってくれる。しかし、残りの先生方は、なかなか入ってこない。この5年間、苦労してきた。

最近では「お試し用」として、4時間バージョンの授業案をつくった。まずは4時間体感してもらい、良かったら増やしてくださいという現実路線だ。草の根的に広めることを、当初から目指してきた。実施する学校には、冊子やアニメーションなどが入っているDVDを渡している。遊びの中で学ばせると言っている以上、ものすごく楽しい授業になっている。アニメ、ゲームあり、盛り上げるところ、ぴしっと締めるところありで、きれいに情動を動かして、そこに対人関係を円滑にする方法などをたたき込んで、強固に定着していく教育だ。

■インクルーシブ教育にぴったり

――なぜ、予防教育に取り組み始めたのか。

もう25年くらい、予防教育に取り組んでいるが、同時に人の健康や適応問題に影響を及ぼす心の特徴は何かという基礎研究をしてきた。そのうちに、実際に教育現場に関わりたくなった。良い方向に子どもを持っていきたい。

理想は、総合的な学習の時間が新設されたように、独自の授業設定がされるべきだと思っている。それまでは、道徳や保健、総合的な学習の時間などに予防教育を採り入れてもらいたい。

教育現場は、今起こっている問題の対処に躍起になっている。だが、学校の先生が本腰を入れるべきところは、そこではない。普段から子どもが健常に持つべき心の特徴を、ゆがみを矯正しながら正しく伸ばしていくこと。予防的に、そういう問題に出合わないようにしていくことが本来の教育なのに、その視点があまりに欠けている。子どもの「健康」を守るためには、治療的な試みと予防的な試みが両輪にならないといけない。

――インクルーシブ教育になじみそうだ。

そう。ぴったりだ。いろいろと課題のある子どもたちを抱える先生方から「どうしたらいいか」と相談されるが、ぜひ、予防教育を実践してみてほしいと勧めている。そういう子どもが、普段は見せない活躍をする。私たちにとっては優等生だ。

この教育を見て「遊んでいる」と言われることがあるが、それは褒め言葉。そこからが勝負で、日ごろクラスに居場所がない子どもが発言して「えーっ」と驚かれる。

予防教育は、どんな教科にも応用できる。授業では当てられた子どもが考え込む場面がよくあるが、考えこませる必要がないことが多い。脳はいろいろ選んでいるけれども、最終的な選択は情動に動かされる。頭にいっぱい答えがあるが、アウトプットできない。情動ときれいにセットにすると誰でも手を挙げる。もり立てたら、クラスの40人が一斉に手を挙げる。うそだと思うかもしれないが、授業を一度、見てほしい。

――道徳の教科化についてどう考えるか。

教科化という形で重点化する試みは大賛成だが、科学的な立場を採るわれわれからすると、その内容には大きな問題がある。

その最たるものが評価だ。道徳性は実態のない抽象度の高い概念で、非常に扱いづらい。それを教育対象にするのはものすごく難しく、測るのも難しい。担任など教員個人の人格を通して評価すると、ばらつきが出て、主観的になる。非常に信ぴょう性が低く、問題のある評価になりやすい。

まず、言えることは、数値化が本当に無理か考え直す必要がある。心理学はそれをしてきた。それから問題なのは、子どもは、何をどう答えれば、先生が喜ぶかを知っている。だから意識が介在する評価だけでは絶対に駄目で、無意識的な尺度を適用することも必要。「そんな大層なことできるか」というのが、現場の意見だろうが、道徳を教科化して評価するならば、それくらいの壁は越えなければ、やるだけ無駄だ。今の道徳で扱う目標は高次過ぎる。もっと人が生きる根本にあるベースが大事。その力は何かということに、この予防教育が通じている。

■2015年（平成27年）4月21日　内外教育　第3種郵便物認可

時事通信社『内外教育』2015年4月21日号より